

## 一枚摺の世界 ――その小釈の試み(4)―

関口 静雄・岡本 夏奈・阿部 美香

### 〔解題〕「おふだ」について(2) ―釘念仏御札へその一―

神仏の御影を梓に刻んで印施するについては、かならずその謂れや由来があるはずであって、これがいわゆる縁起である。たとえば今も日光山輪王寺の常行堂から出されている「釘念仏御札」には、おふだを入れた紙袋の裏面に次のような縁起が記されている。

#### 釘念仏のいわれ

幕末まで、寂光の滝の周辺に寂光寺というお堂があり、念仏道場として大変栄えておりました。このお堂から授けられたお札が「釘念仏」であり、次のようないわれがあります。今からおおよそ五一〇年程昔、このお堂に覚源上人という高德な方が念仏三昧の日々を送っておられました。ある日、閻魔大王の招きにより地獄において死者が生前におかした罪の大小によって、身体中に長短四十九本の釘を打たれて苦しむさまを詳に見聞され、この苦しみから逃れる道は念仏以外にはないとさとされました。その時に大王と上人との間に取交わされた約束書がこのお札といわれております。それ以来、人々がなくなれると、必ずこのお札を受け、塔形をした札の白抜き穴を近親縁故者によって墨で埋め、納銭共々頭陀の中に収めて葬えば、鉄釘の苦を逃れて極楽往生が疑いないとされて参りました。寂光寺がなくなった現在では、このお堂から授けられています。

寂光寺は、社寺の草創記中わが国最古の写本に属するとされる鎌倉時代初期成立の『瀧尾建立草創日記』に、弘仁十一年(八二〇)七月、東寺寺務であった弘法大師空海が日光に來山し、山中の諸伽藍を修復したり、行儀

を整えたりした折りに、瀧本に不動明王堂を建立し、これを寂光寺と名付けたと伝えるが、実際には『草創日記』の成立以前、鎌倉時代のごく初期の建立と考えられる。その後の展開は不明な点が多いが、覚源上人の活躍した室町時代の文明年間(一四六九―一四八七)から江戸時代を通じて念仏道場として繁栄した。しかし、明治初年の神仏分離で廃され、同十年には火災に遭って焼失し、今は礎石を残すだけである。

天保四年(一八三三)十月に植田孟縉が著した『日光山志』卷三には、弘法大師を開基とする寂光寺には弘法自作の不動尊を安置する不動堂はじめ、常念仏堂・三十番神堂・拝殿、また弘法勧請の弁財天を本地とする下照姫命を祀る寂光権現・求聞堂跡等々があったと伝え、常念仏堂について、  
常念佛堂 本尊三聖阿彌陀は、恵心僧都の作なり。此堂より釘念佛の札を出す。此事ハ覺源上人の開基にて縁起にくハシ。又此堂の前に、釘念佛を修したる札を納るもの、石にて函の如く造れり。(神道大系本)

と記し、十二の手箱に納められた宝物の中に「釘念佛縁起 御門主御筆」が所蔵されていると伝え、「元祿年中、御門主御染筆、卷中処々圖畫ハ狩野常信筆」として『釘念佛縁起』の本文を載せている。

寂光寺の常念仏堂で出されていた釘念仏御札を引き継いだのは輪王寺山内の常行堂だった。常行堂は嘉祥元年(八四八)、慈覺大師円仁によって隣接する法華堂とともに、常行三昧・法華三昧の道場として建立されたもので、かつては日光一山の中核的存在であった。本尊の宝冠五智阿弥陀如来とそれを圍繞随侍する法利因語の四菩薩はすべて孔雀座に乘座する特異

な尊形で、後戸には阿弥陀如来と常行三昧を守護する摩多羅神が祀られている。これを鎌倉將軍家とくに源頼朝が篤く崇敬した。現在では回向道場となっているが、六十六部の起点であったことや、今も一山の修正会がここで執行され、牛王宝印が印施されることはよく知られている。

『日光山志』がいう寂光寺の宝物「釘念佛縁起 御門主御筆」というのは、輪王寺に所蔵される『釘拔念仏縁起絵巻』（紙本着色、一卷）のことである。その詞書が神道大系『日光・二荒山』（菅原信海著、一九八五年二月、神道大系編纂会）に『寂光寺釘拔念佛縁起』として翻刻収録されている。その巻末の識語を同書によって示す次のようである。

文明十三年辛丑六月弟子沙門某謹識

右寂光寺釘拔念佛縁起

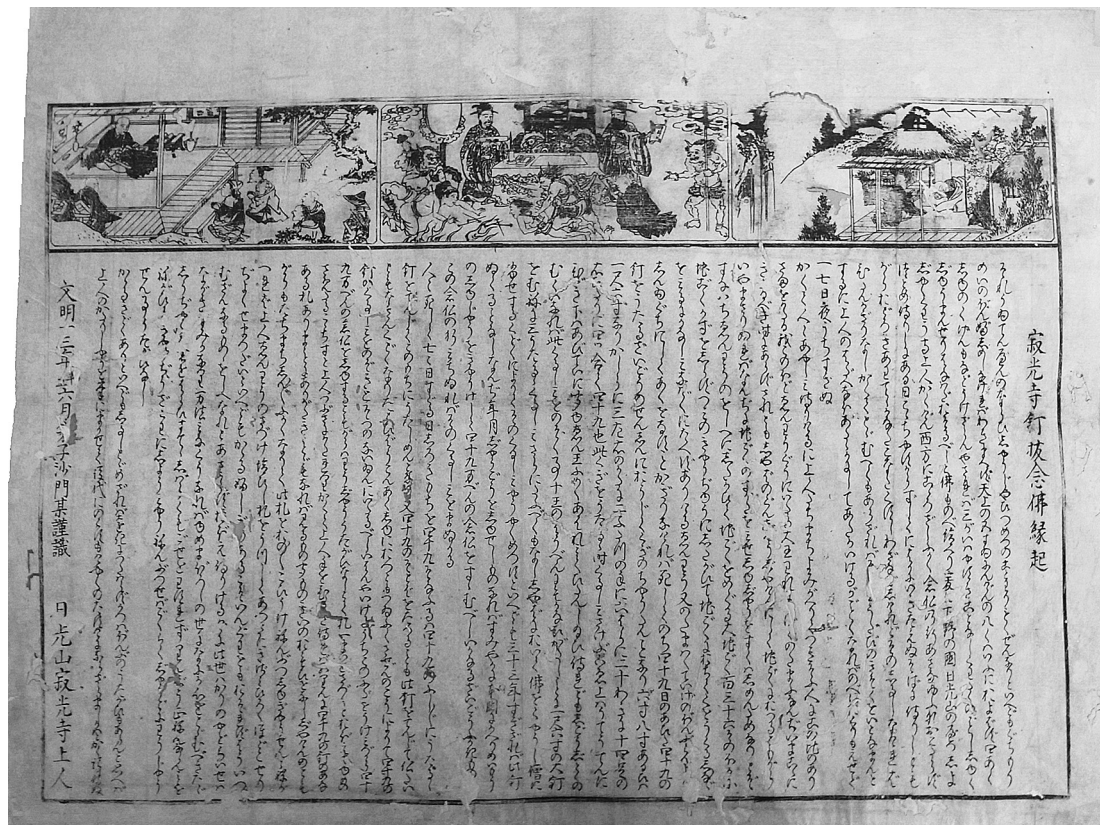
舊本書畫並不<sub>レ</sub>好、今改製而寄附焉。

元禄五年<sub>壬申</sub>四月

當山座主第五十六世三品（花辨）親王

右の識語から、この『釘拔念仏縁起絵巻』が輪王寺第五十六世座主公辨親王によって元禄五年（一六九二）四月に製作されたものと知られるが、それは「文明十三年辛丑六月弟子沙門某謹識」と年紀の記された「舊本」の書と画がともに「不好」状態であったからで、詞書を公辨親王がみずから染筆し、「覚源の臨終」場面を益信に、「閻魔王宮」の場面を探雪に、「釘念仏御札の印施授与」の場面を常信に、いずれも駿河台狩野派の絵師に描かせたのである。親王は新たに製作した『絵巻』を寂光寺に寄附したのであるが、しかし、文明十三年（一四八二）六月に弟子沙門某が撰した「舊本」のその後については触れておらず、『日光山志』にも記載がない。「舊本」の所在は不明のままである。

この『絵巻』をわずか一紙に収めた摺物がある。「寂光寺釘拔念佛縁起」と題され、末尾に「文明十三年□六月□子沙門某謹識 日光山寂光寺上人」と記された木版の一枚摺で、上段に「絵巻」と同じ三場面の絵を配し、下段に平仮名文の詞書が記されている。画像と詞書の翻刻文を紹介しよう。



木版墨摺 36.0×48.5 cm 江戸時代後期 宮島コレクション蔵

## 寂光寺釘拔念佛縁起

それうゐてんべんのならひしやうじやひつめつのことわりもくぜんなりといへどもぐちもう／＼めいのぼんぶしめしなればわきまへず天上の五するにんげんの八くはいふにおよばず四あく／＼しゆのくげんもなとうけざらんやされば三がいはやすき□となしくわたくのごとししゆく／＼じゆうまんせりはなはだおそるべしと佛ものべ給へり爰□□野の國日光山のべつしよ／＼じやくくわう寺上人かくげん西方にこゝろざしふかく念仏の行あさなゆふなおこたらず／＼つとめ侍りしにある日こゝちやすからずしてにはかにいきたえぬそばに侍りしとも／＼がらおどろきあわてゝかなたこなたくすしわざな□しけれどそのしるしなれば／＼ひたなかぎりなしかくてとゞむへくもあらざればそ□そうだびのきそくをいとなまんと／＼するに上人のはだへなほあたゝかにしてあたたかいけるがごとくなればのべに□くりもえせで／＼一七日夜うちすぎぬ

かくて人々あやしみ侍りけるに上人たちまちよみがへりてつきそふ人にこの比のあり／＼さまをかたる我このほどゑんわうぐうにいたる大王われに□□てのたまふなんぢいまこゝに／＼きたるべき時にあらざされともしやばのぐんじやうじやけ□にして地ごくにおつるともがら／＼いやまさりぬればなんぢに地ごくのすがたをみせしゆじやうをすくはしめんためなりとぞ／＼すなはちゑんわうのをしへにしたかひて地ごくをめぐる大地ごく百三十六そのほかに／＼地ごくかずをしらずつみのきやうぢゆうにしたがひて地ごくにおちてくをうくるしな／＼をみるにかなしみなげくにたへずありけるゑんわう又のたまはくていげのぼんぶとんよ□／＼しんるぐちにしていあくをなすことかぎりなければ死してのち四十九日のあひた四十九の／＼釘をうたるさいごうのせんしんにおうじてくぎのちやうたんことなり六寸八寸あるひは／＼一尺六寸なりかしらに三左右のかたに二ふたつの手に六はらに二十わきに十四足の／＼右ひたりに四ッ合て四十九也此くぎをうたるゝ時くるしみをさけぶこゑ上はうてうてんに／＼ひゞき下はあびていに聞ゆゑん王ふかくあはれみてひたんし給ひ侍れどもしごうじとくの／＼むくいなれば此くるしみをのぞく事十王のはうべんにもかなひがたしことに一尺六寸の大釘／＼をむねに三つたるゝくるしみをさらにたふべくもなししやばにおいて佛をくやうし僧に／＼ふせするくどくによりてそのくるしみやうやくめつすといへ

ども三十三年すぎざれば此釘／＼ぬくることなしなんぢ年月じやうごうをしゆせしものなればすみやかに本國にかへりめいもう／＼のしゆじやうをきやうけして四十九万べんの念仏をすゝむべしいかなるさいごうふかきもの□この念仏の行みちぬればそのくるしみをまぬかる

人々死して七々日すぐる日しろきもちを四十九そなふるは四十九のふし／＼にうたるゝ／＼釘をてんじてこのもちにうたしめんとな□又四十九のそばをたつことも此釘をてんじて仏たい／＼ともなさんくどくなりたとひばうこんあくしゆにおつともつゝふくせんのこうによりて四十九の／＼釘のくるしみをのぞきとそつのないゐんにいたるべしいはんやいけるうちこのふだをうけみづから四十／＼九万べんの念仏をしゆするともがらはわうじやううたがひなしとて札一まいをさづくとおぼえてゆめの／＼さめたるこゝちすと上人つぶさにかたれりかくて上人手をひ□き侍れば五りに四十九の釘のあな／＼ある札ありまことにありがたきことゞもなれば見るもの聞ものきいのおもひをなしじやけんのも／＼がらもちまちしん／＼ふかくなりて此札をおの／＼こひうけねんぶつしゆぎやうせんとねが／＼へれば上人ゑんわうのさづけ給ひし札をうつしてあつさにきざみひろくほどこせり／＼ぢよくせまつだいといへどもかゝるふしぎ□あるこそいんぐわをもおそれずはういつ／＼むざんなるものゝをしへなれとあさからずおぼえ侍りける□に此世はかりのやどらいせは／＼ながきすみかなり万法みなくうなればゆめまぼろしの世になにか心をとゞむべきたゞ／＼しうぢやく□念をはらひすてゝしばらくもごせをわすれずりんじう正ねんならんことを／＼ねがひ□きや□ぢうぎ□わにしようみやうねんぶつせばごくらくじやうどにわうじやう／＼せん事うたがひなし

かゝるきどくありといへどもしるしとゞめざれば遠きにつたはらずかつはぼんぶのうたがひもあらんと思へば／＼上人のかたりしやうを筆にまかせて後代にのこすもけやくのたすけにならざらましかはとかく記し侍ぬ

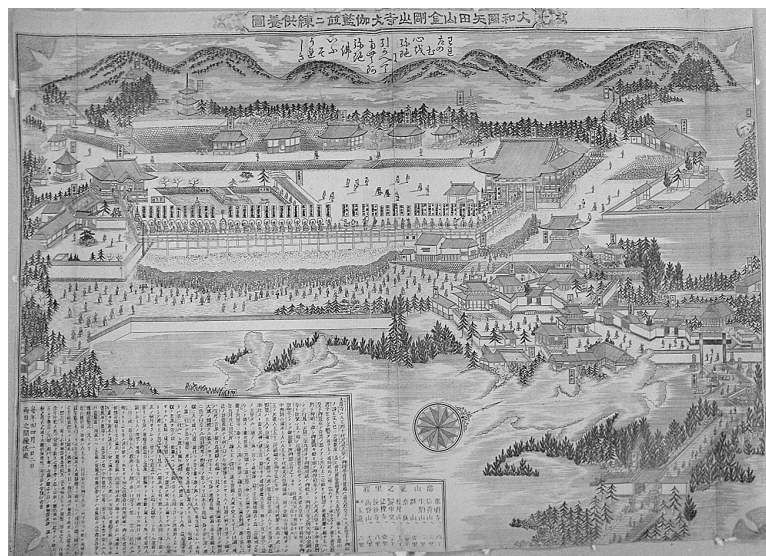
文明十三年□六月□子沙門某謹識 日光山寂光寺上人

(関口静雄)



### 13. 大和国矢田山金剛山寺大伽藍並ニ練供養図

銅板墨摺 三七・五×五三・二 cm  
明治十六年（一八八三）



奈良県大和郡山市の高野山真言宗矢田山金剛山寺は、開基当初は十一面観音菩薩と吉祥天を本尊としていたが、平安時代弘仁年間に満米（満慶）上人作の延命地藏菩薩が安置されてからは地藏信仰の中心地となった。その延命地藏菩薩は右手親指と人差指を結んだ独特のスタイルで、阿弥陀如来の来迎印を彷彿とさせる。

『大和国矢田山金剛山寺大伽藍並ニ練供養図』に、「われたのむ心を弥陀に引かへて南無阿弥陀仏いふそうれしき」と詠歌が記されているが、その阿弥陀仏は、現在は裏堂に安置されている藤原時代作の木造阿弥陀如来坐像のことである。また、画面には小さい地藏菩薩が二十体も描かれていて、ここが地藏菩薩の霊場であることを明確に示している。

『大伽藍並ニ練供養図』には「略縁起」が付載され、練供養とかかわりの深い満米上人の巡獄譚、つまり本尊造立由来譚が記されている。<sup>注</sup>それによると金剛山寺の練供養は、「淳和天皇の天長三年（八二六）から始まり、

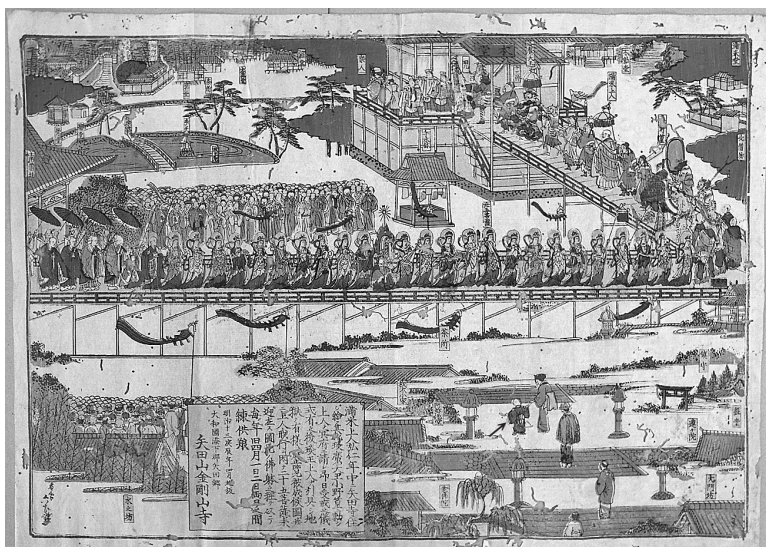
永祿五年（一五六二）までの七百三十七年余、満米上人の地獄巡りと、上人の戒行の徳で二十五菩薩が来迎する様子を演じてきたが、戦火によって仏体装束が焼失し長期にわたって休止していた。それが慶応三年（一八六七）に再開され、以降毎年旧暦四月一日一日に行われてきた」という。

しかし、この「略縁起」には「矢田地蔵縁起」の内容と異なる点がある。『地蔵縁起』は冥官が満米上人を迎えにいくが、「略縁起」は「篋即勅命ヲ蒙リ矢田寺ニ参り上人ニ謁シテ勅詔ノ趣キ具宣ヘ玉ヘハ」とあり、また本尊の霊験譚である武者所康成蘇生譚については触れていない。

金剛山寺は参道が金堂に向かって直線的に伸びており、その両側に子院が並ぶ伽藍配置である。『大伽藍並ニ練供養図』には、東門・大師堂・春日四霊石・辻堂・大門坊・金比羅堂・ミソネブリ地藏・念仏院・阿弥陀堂・水之坊・二王門・三門・職工所・灌頂堂・蓮華院・北門・春日若宮神社・宝庫・南門・南僧坊・菩薩堂・大師堂・六角堂・絵堂・奥ノ院・天武天皇神影堂・廻向所・三重塔・放生池・極楽橋・弁才天・流灌頂川・焰魔堂・接待所・上念仏堂・観音堂・不動堂・十三重塔・金堂・六地藏・西門・大坂道・墓所・三十八社・大石・満米堂・北僧坊・鐘楼堂・勧進所が描かれている。（大師堂は二か所ある。）

中央に描かれた菩薩堂から金堂にかかる渡御橋が練供養の御渡りの舞台である。この御渡りという儀式は、『矢田地蔵縁起』に描かれた閻魔王が満米上人を案内して地獄の鉄門に向かう場面をドラマ化したものである。従って、一般的な練供養は奈良当麻寺の「聖衆来迎練供養会式」のように、浄土教思想に根ざした、二十五菩薩が西方浄土から来迎して衆生を浄土に導くという構成であるのに対して、金剛山寺の練供養は、来迎した地藏菩薩が現世を象徴した菩薩堂から地獄を象徴した本堂に赴き、法要後は菩薩堂に戻るといふもので、西方を死者の世界とするのは同じだが、『矢田地蔵縁起』による地藏菩薩の出現と満米上人の冥土往来を現わすため、極楽ではなく、まず地獄に向かってるのが特徴である。

御渡りの行列順も詳細に描かれている。地獄の案内人としての役割を持つ無毒王（本地賤首菩薩）を先頭に、善部童・秦広王（本地不動明王）・初江王（本地釈迦如来）・宋帝王（本地文殊菩薩）・五官王（本普賢菩薩）・閻魔大



王（本地地藏菩薩）・赤鬼王（本地愛染明王）・變成王（本弥勒菩薩）・大山王（本地藥師如來）・平等王（本地觀世音）・都市王（本地大勢至王）・五道轉輪王（本地阿彌陀如來）・惡部童・俱生神・満米上人（本地地藏菩薩）・俱生神・五道冥官・小野篁（本地觀世音）・牛頭王（本地大日如來）・馬頭王（本地馬頭觀音）・青鬼王（本地威德明王）・觀世音菩薩・大勢至菩薩・藥王菩薩・藥上菩薩・普賢菩薩・法自在王菩薩・院羅尼菩薩・白象王菩薩・虚空藏菩薩・宝藏菩薩・德藏菩薩・金藏菩薩・光明王菩薩・金剛藏菩薩・山海惠菩薩・華嚴菩薩・日照王菩薩・月光王菩薩・衆宝王菩薩・三昧菩薩・獅子吼菩薩・定自在王菩薩・大威德菩薩・大自在王菩薩・無辺身菩薩の順に並んでいる。金剛山寺の「練供養図」はもう一つある。明治十三年（一八八〇）に公

刊された『矢田山金剛山寺練供養図』（三六×五二〇cm）である。これは御渡りに重点を置く構図がとられ、木版多色刷りの鮮やかな色合いに目を惹かれる。特に雲や御渡りの衣装・飾りに使用される赤色は、衆生を救済する慈悲の心を象徴している。

ここに描かれた御渡りも、明治十六年版『大伽藍並ニ練供養図』と同様に、衆人・児・十三仏（炎魔大王）・満米上人・小野篁・二十五菩薩と並び順は大まかだが、たとえば十王ではなく十三仏（蓮華王・祇園王・法界王）であることや、赤鬼が閻魔大王の前に描かれているこ

となどから、練供養は開催ごとに式次第に変更があったものと考えられる。なお、十三仏に関しては閻魔王以外の姿は描かれておらず、閻魔王・満米上人・小野篁に焦点が当たる構図になっている。それは彼らが進行方向や参拝客ではなく、こちら側、つまり『練供養図』を見る者に顔を向けることによってさらに強調されているのである。

二十五菩薩は観音・大勢至・藥王・藥上・普賢・法自在王・（合掌）・陀羅尼・白象王・宝藏・德藏・金剛藏・（合掌）・光明王・定自在・山海惠・衆宝王・（合掌）・月光・（合掌）・三昧王・（合掌）・獅子吼・大自在王・無辺身の諸菩薩の順に描かれている。ただ合掌した姿で描かれた菩薩については、それが金藏・華嚴・日照王・虚空・大威徳の五菩薩のいずれであるか特定できなかった。

参拝客は、明治十三年版『練供養図』は三二〇人ほどであったが、明治十六年版『大伽藍並ニ練供養図』には一七〇〇人以上の人物が描かれており、金剛山寺の練供養が世間に広く人気を集めていたことが推測される。御渡りの舞台である渡御橋に参拝客が集まり、勧進所付近にもお札をもらおうとする人々が列をなしている。人物についても両図とも細かく描かれている。老若男女、和装と洋装が入り交じっているが、和服で髪を結った男性の姿が多い。明治六年に明治天皇が断髪したことで官吏を中心に洋髪や散切り頭が流行したが、この当時はまだ一般の人々には影響が小さかったようである。明治十三年版は服装から見て地元の人たちの参拝風景といった印象を受けるが、明治十六年版には笠をかぶり、杖をついている旅人の姿が多いことから遠方からの参拝客も多かったことがわかる。天秤棒を持つ商人も描かれているから、境内では参拝客相手の商売も種々行われたのだろう。なお、明治十三年版『練供養図』の右下の目立つ位置に、赤い和服を着た子（矢印）が描かれているが、これは「子どもの守り神」としての地藏菩薩を象徴したものと考えられる。（岡本夏奈）

（注）この「略縁起」は、関口静雄編「仏版文字資料翻刻（2）」（昭和女子大学大学院生活機構研究紀要」第23号（二〇一四年）に翻刻しておいた。



# 14. 箱根権現御神影

木版 二六・〇×一二・五 cm 江戸時代後期



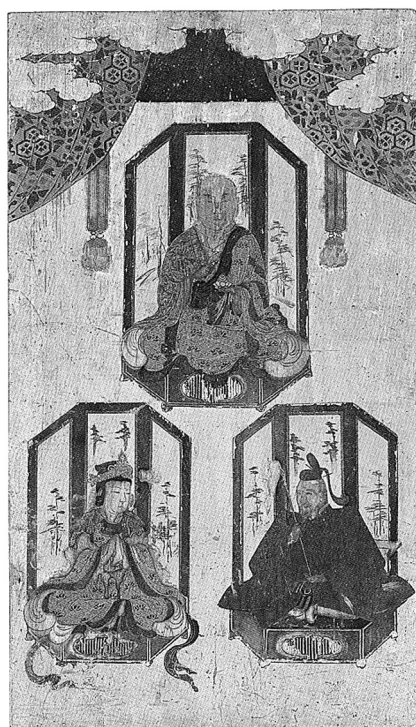
関東総鎮守箱根大権現として名高い箱根権現社（現、神奈川県箱根神社）の御影札である<sup>1</sup>。菩薩形の神とともに、男神、女神の三柱が描かれている。神社の創祀を担ったのは、常陸国の鹿嶋社神宮寺や伊勢国の多度社神宮寺を創建したことも知られる奈良時代の修行僧、万巻上人である。その由来は、『箱根山縁起并序』（鎌倉時代成立）に、次のように記されている。鹿嶋社に神宮寺を建て住持すること八年、一心に有縁の仏土を探し求めていた万巻は、瑞夢を得て箱根山に至る。修行を積み重ね、三年を経たころ、夢に三輩が現れ、「我々はこの山の古くからの主である。世の人々を救おうと仮の姿であらわれた、仏菩薩の垂迹である。汝はここに留まり、修行を重ねるように」と告げた。容貌はみな異なり、比丘の身で現れた神は左手に宝珠、右手に独古を握っていた。宰官（大臣）の身で現れた神は、手に白払を持っている。婦女の身で現れた神もいる。これら比丘形、宰官形、婦女形の三容は、各々万巻に対して、自分の正体が文殊菩薩、弥勒菩薩、観音菩薩であると諭し、異口同音に「池水清浄浮月影 汝意清潔来三体 三身同共住此山 結縁有情同利益（池の水は清らかに月影を浮かべている。お前の心も清浄であるがゆえに、我らはやってきた。我らは共に等しくこの山に住み、結縁する人々を等しく利益しよう。）」と唱えた。そこで、万巻は

三容を一社に崇め、「箱根三所権現」と祀ったという。

ここに詠じられた四句の偈頌は、仏菩薩でもある箱根の神々が、万巻に對して箱根山に参る人々を平等に救おうとの誓いを象った、聖なる歌である。「池水」に浮かぶ月影とは、清らかな水を満々と湛えた芦ノ湖に映る月影にほかならない。それは、箱根の山々に迹を垂れた神々の姿を映し出す御正体の輝きに通じ、神秘的な顕現のイメージを喚起する。万巻の清浄なる信心に応え、その姿を初めてこの世に現し出した神々は、衆生済度の誓願をもった仏菩薩の垂迹であった。

この尊容に基づき江戸時代に制作された御影が、今も箱根神社に伝えられている。長方形の板絵に描かれた箱根三所権現垂迹御影を掲げてみよう<sup>2</sup>。そこには万巻により一社に祀られた三容が、社殿に見立てられた空間に、三曲屏風を背にして描かれている。上部中央に座す比丘形（僧形神）は、左手に如意宝珠、右手に独古を持す。そのもとに、衣冠束帯姿で白い払子を手につく宰官形（男神）と、唐装束に蓮の花を手にした婦女形（女神）が座す。それは裏面の墨書銘に「万巻瑞夢感得之三容」と記されるように、まさしく開山の縁起に拠って描かれた尊像であった。

神社には、三容を一体ずつ円形の板絵に描き、御正体のごとく表現した垂迹図もある。また別に、能善権現と駒形権現を加えた箱根五所権現の掛幅画（一幅）もある。ここでは、中央の比丘形を囲むように、右上に宰官



箱根三所権現垂迹御影  
板絵 65.5×45 cm

形、左上に婦女形、右下に能善権現（本地は普賢菩薩）、左下に駒形権現（本地は大日如来）が描かれている。

このように見ると、箱根三所権現の御影は、比丘形、宰官形、婦女形の三容が、規範として重んじられてきたことが知られる。ところが、冒頭に掲げた御札は、比丘形の神を、本地の仏である文殊師利菩薩の像で描く点に特色がある。改めてその図を拝すれば、三曲屏風の前に、文殊菩薩が、左手に如意宝珠、右手に利剣を持し座している。

箱根山金剛王院東福寺は、箱根権現の祭祀を司り、一山の僧侶や修験を率いてきた別当寺である。江戸時代には『縁起大略 曾我両社勝名荒神実説曾我物語』などの縁起も刊行しており、勧進所としての役割も窺える。御影に描かれた文殊像は、金剛王院が箱根権現の本地仏として、かつまた箱根山の本尊として重んじてきた文殊像の姿を殊に強調した神像として見ることができよう。

抑も「箱根（筥根）」という地名は、文殊菩薩の浄土であることに因む。先に掲げた『箱根山縁起』には、欽明天皇の御時、高僧が訪れ、山々を見渡して、「峨々と聳え立つ険しい山の形は、まるで（文殊菩薩の智慧の象徴であるところの）梵篋のようだ。これは清凉世界、文殊師利の霊場に違いない。筥はすなわち般若実相の根源である。ゆえにこの地を箱根山と名付けよう」と語り、般若寺（のち東福寺に改められ、金剛王院となる）が建立されたとの縁起が記されている。古式を伝える延年の詞章にも「其名箱根ト云事、文殊般若ノ篋ナレバ、真如実相ノ智恵ヲ収ムナルベシ」と謡われている。文殊の梵篋と観じられた峻険な箱根の山の尊容は、同時に文殊が右手に持す利剣のイメージとも重なりあう。

興味深いことに、箱根権現の神宝のなかに、文殊の利剣と袈裟が伝えられていた。『新編相模国風土記』は、利剣については図も添えて、次のように記述している。

文殊利剣一振（嵯峨天皇ノ御寄附ト伝フ。銘ニ文殊利剣安部国直作トアリ。

罽ハ蓮華座ナリ。鞘ハ惣テ赤銅ニテ彫アリ）

文殊袈裟衣一具（嵯峨帝ノ御寄附ト云。地ハ緋子ニ似テ濃茶ノ色ナリ）

嵯峨天皇の御寄附という由緒は、万巻上人と嵯峨天皇の格別の因縁を背景に語られたものだろう。『箱根山縁起』には、九七歳で示寂した万巻が、嵯峨天皇の夢に現れて、「わたしは文殊師利の応化（仏菩薩が世の人々を救うため、時に応じ人に応じてあらわした姿）である。生縁尽きて人間としての命は終わってしまったが、魂は本山（箱根山）に還り、人々を救い宝祚（天皇の寿命）を守り続けましょう」と託宣したこと、それを受けて嵯峨天皇が勅命を発し、駿河・相州・三河を箱根山に寄附して権現の祭祀と万巻の供養の料となしたことが記されている。文殊の利剣や袈裟は、神宝開帳の折などに、嵯峨天皇の崇拜の証として披露されたことだろう。

金剛王院は明治時代の廃仏毀釈により廃寺となり、箱根権現時代の遺産の多くは失われてしまった。箱根権現社に祀られていたであろう本地仏は、文殊、観音、弥勒のいずれの像も残っていない<sup>3</sup>。そうしたなかで、箱根権現御影として描かれた文殊像は、かつての本地仏の姿を写し伝える貴重な図像と言い得る。さらに言えば、上部に、文殊、弥勒、聖観音の種子である梵字（マン・ユ・サ）を掲げ三所権現の本地と垂迹の関係を明らかにするこの図は、もともと金剛王院のもとで制作され礼拝された、垂迹曼荼羅に由来する図像であったかもしれない。それを簡略化し、御札として摺られた御影は、社人や修験を介し諸国の人々に頒布され、掛け軸に仕立てられて礼拝されたのである。

（阿部美香）

#### 【注】

- 1 掛幅装。天地が切りそろえられ、縦寸がやや短い寸法になっている。
- 2 『箱根の宝物』（箱根神社編、二〇〇六年）にカラー図版で掲載されている。
- 3 かつて金剛王院の子院であった興福院には、能善権現の本地仏であった普賢菩薩像が廃仏毀釈の荒波から逃れて安置されている。  
（本研究はJSPS科研費10490083の助成を受けたものである。）

（せきぐち しずお 歴史文化学科）

（おかもと かな 大学院生活機構研究科生活文化研究専攻一年）

（あべ みか 歴史文化学科）